開催地名：埼玉県三郷市	
開催日時	令和４年９月27日（火）　13：40 ～ 15：10
開催場所	三郷市立彦糸中学校
語り部	菅野　祥一郎　（岩手県陸前高田市）
参加者	彦糸中学校第２学年生徒・職員　102名
開催経緯	本校中学２年生は、東日本大震災発生時３歳という年齢で、震災発生時の様子やその後の避難所生活、高速道路分断による物資の供給もままならない状況を理解している生徒はほとんどいない。近い将来、関東地方を中心とした地震が発生する可能性について、各方面から指摘されているところであり、中学２年生となった現在は、守られる立場から、幼児や小学生、高齢者を助ける立場へと変化していることを自覚し、災害時における行動を確認しておきたいと考えている。東日本大震災の語り部のお話を直接伺うことで、自分事として、考える機会をいただきたい。
内容	（１）はじめに 私が住む陸前高田市は、岩手県の南端に位置し、すぐ隣は宮城県である。東日本大震災では津波の被害を受け、多くの人命が失われた。 津波には３つの特徴があると言われている。１つ目は一度に多くの命を奪ってしまうということ、２つ目は、遠くまで流された人の遺体が見つからないということである。そして３つ目は、いつのまにか忘れ去られてしまうということである。大きな津波は毎年来るものではない。忘れたころに突然やってくるところに怖さがある。 今日の私の話を聞いて、ここ埼玉県は海がないので、津波の心配は無用だということではなく、いつ、どこで起きるかわからない災害に対して、自分の命を守るためにどうすればいいのかを、是非自分で考えてほしいと思う。 （２）避難について 地震が発生したときに所用で校外にいた私は、急いで学校に戻ろうとしたが、途中の橋が通行止めになり、想定外の時間がかかってしまった。戻った時、子どもたちや近隣の住民は校庭に整列していたが、既に津波は川を遡上しており、時間の猶予はなかった。マニュアルにはなかったが、私は、丸太の階段を使って隣の山の上にある青いフェンスまで、６年生から順番に登るように指示した。低学年から登れば渋滞してしまい、時間がかかってしまうので。 さっきまで校門付近にいた数十人の人たちは、私たちのそばから消えてしまった。校舎に逃げた人たちは、屋上の貯水槽の上に登れた一人の方を除き、流されてしまった。子どもたちが助かった理由は、そして住民の生死を分けたものは何か。それは、「誰よりも早く避難することを決断した」という責任ある判断をしたことに尽きる。 （３）避難所では 私たちの学校の子どもたちは全員が助かった。そして、何日か経ってどんどん家族の迎えが来た。避難所ではみんなが一生懸命働いた。特に６年生と中学生が頑張っていた。そして、いたるところで家族や親戚、知人、友人との再会の光景が見られた。しかし、日が経つにつれ、お互いの無事を涙ながらに喜び合う様子は少なくなり、遺体との対面が増えていった。それでも、たくさんの行方不明者がいる中で、発見された人は幸運だったと言える。

	避難所で生活していたある小学生には、最後まで誰も迎えに来ることはなかった。一人ぼっちで、どんな思いで家の人が現れるのを待っていたか、皆さんは想像がつくだろうか。そんな中で許せない出来事もあった。私が直接見たわけではないが、家族が瓦礫の中からようやく息子さんの遺体を発見した際、その横には、中身が全部抜かれた財布があったという。こんな状況の中で、なぜそんなことができる人間がいるのか。皆さんはそんな人間にだけはならないでほしい。 （４）皆さんへのお願い 皆さんに、以前教師だったという立場からお願いしたいことがある。それは「命を大事にしてほしい」ということである。まずは自分の命を、そして隣の人の命を尊重していただきたい。必死で逃げたのに、命を絶たれてしまった少女がいる。彼女だけでなく、たくさんの若い命が一瞬にして奪われた。どんなに怖かったのか、無念だったのか、想像しても、その恐ろしさや無念さは私にはわからない。こんな恐ろしい災害が起こるなんて、だれが想像できたであろうか。 しかし、人生には思いもよらないことが起こる。災害は、いつ、どこで起こるかわからない。だからこそ、今、この時を大切にして、自分の命を大切にして、生きていることの幸せをかみしめてほしいと思う。陸前高田市の人は、大切な人をたくさん亡くした。しかし、厳しい環境の中で、精一杯明るく前を向いて歩む人がたくさんいる。皆さんには自分の家があり、家族がいる。そして、自分の学校があり、学校には広い校庭があり、友達もいる。皆さんには当たり前のことかもしれないが、素晴らしいことであるということを認識してほしい。当たり前の幸せを失った人たちのためにも、自分の家族や友達を大事にして、一生懸命勉強してほしいと思う。
開催地より	本日お話いただいた内容は、災害の恐ろしさを我々にしっかり伝えるものであり、津波の恐ろしさ、命の大切さを強く感じさせるものだった。学校としては、災害を含めた困難なことに直面したときの心構えや、いろいろな場面での避難訓練の実施方法について、取組みを強化していきたいと思う。